



ACADE見IC No.170

## 日本史研究の最前線

平清盛、源義経など数々の日本史上の英雄たちが登場する中世前期。彼らの生き様は、21世紀を生きる我々さえも魅了してやまない。そんな中世前期を研究している元木教授に日本史研究の最前線に立った視点から、歴史学とはどのようなものかということを中心に語っていただいた。

### 人間・環境学研究科 元木泰雄教授

#### 中世史研究のきっかけ

大した理由はないですが、子供の頃から小説とか歴史ドラマをよく見ていたということがありますよね。特に、『平家物語』の中の逸話は親や祖父母からよく聞かされました。『平家物語』の勇壮な合戦、平氏滅亡で幼い天皇が祖母と入水したといった劇的な話に関心を持つようになりました。

それから京大に入って、今は京大の名誉教授をされている教授の授業を受けたときに、子供心に漠然と源平合戦が好きだったのが、学問的に考えるとこんなに面白いのか、と思ったのもひとつのきっかけです。

あと、これは恥ずかしいからあまり言いたくはないんですが、昔『源義経』というテレビドラマがあったんです。それに出演していた女優さんがとても綺麗だったので、それでさらにこの時代が好きになったなんてこともありますね。

#### 歴史研究の醍醐味

我々は今の時代を生活しているわけですが、今の時代全体というのは見えにくいんですよね。どうなっていくかも分かりません。また、我々自身も自分の人生がどうなっていくかは分かりません。

でも歴史家は過去の時代を取り扱っていくことで、その時代全体の構造やそれがどう移っていくかということが見えてくる。過去の人物なら人生を通して評価できる。このように時代や人物をトータルに捉えていくことは、歴史家でないとなかなかできないかなと思います。

あとこれは当たり前のこと、どの学問にも共通することですけど、今まで信じられてきた通説を塗り替えたときに、一番学問の醍醐味を感じるときだと思います。

私が研究している時代は源平合戦の時代ですから、特に『平家物語』など物語の影響が強いわけです。そうすると通説や俗説がかなり根強く残っている。それを塗り替えていくというのが従来の常識を否定することにもなって、達成感を感じますね。

#### 元木教授プロフィール

1954年生まれ。兵庫県出身。1978年京都大学文学部卒業、1995年京都大学博士（文学）取得。現在は京都大学大学院人間・環境学研究科教授。専門分野は日本中世前期の政治史。研究の主要なテーマは武士の成立、院政、平氏政権、源平争乱、鎌倉幕府の成立など。

はみだし  
すてーじ  
百円拾った。どうしよう？  
⇒百円分良いことをしましょう。

(文・院 ソウタロウ)  
(赤い羽根100枚買うとか；編)

#### 歴史学の研究方法

歴史学とは史料を読みこなすことが第一なんです。ほとんどの史料が漢文で書かれているのですが、それを読み解いて意味を正確にとらなきゃいけない。史料にはそのころの日本にしかない独特の言葉や当時の人物・官職・地名があるので、さまざまな知識をもとに正確に内容を捉える必要があります。

それができるようになった上で、今度はどの史料が正しいかということを見分けなきゃいけない。歴史書に書いてある、だから本当だ、ということにはならない。どこが本当でどこが虚構なのか、どの史料を信じていいのか、それを正確に見極めていく能力を身に付けなければならないんですね。これを「史料批判」といいます。

史料を解釈してその真偽をある程度見極めたうえで、自分の問題意識に基づいて論を立てていく。これが歴史学の研究です。

#### 史料批判の実例

例えば、源頼朝が源義経を滅ぼした理由として、平氏追討で大活躍した義経への頼朝の妬み、もしくは義経が頼朝に無断で朝廷の官位を得たということがよく言われます。しかしよく史料を見直すと、頼朝が義経を滅ぼしたのは必要に駆られてであったということが分かります。

というのは、当時の朝廷の権力者である後白河法皇は東国の守りは頼朝、西国の守りは義経というように二人で日本を分担させようとした。義経もそのつもりでいたのでしょう。しかし、武士の統一政権を作ろうとしていた頼朝は、義経に都で大きな顔をされると政権が分裂してしまうかもしれない、と危機感を抱いたわけです。また、平氏追討で手柄を奪われた東国武士が義経を恨んでいたこともあり、義経を倒さないと自分の軍団を維持できないと判断したため、義経追討はやむを得なかったということが最近では分かっています。



▲研究室には中世に関する文献がずらりと並ぶ

義経が無断で官位を得たことが問題だという話は、『吾妻鏡』という鎌倉幕府の公式歴史書に書いてあります。それを今までの歴史家は信じてきた。しかし、『吾妻鏡』には多くの虚構が含まれていることが明らかになってきた。そこでこの問題についてもさまざまな視点から検討すると、頼朝は義経の任官に不快な態度を示してはなかったということが分かりました。このようにひとつの史料を鵜呑みにせず、思い込みを排して客観的に分析していくというのが史料批判であり、歴史学の面白いところでもあります。

#### 平清盛の魅力

やはり自分が今まで研究対象にした人物に魅力を感じてしまいますが、中でも平清盛が一番魅力を感じますね。清盛の前半生は朝廷の貴族に友好的な態度をとります。ところが晩年の彼は、後白河院政を停止し外孫の安徳天皇を擁立し思いのままの王権を作り、王権を従属させた独自の権力を作ろうとしていく。



▲六波羅蜜寺が所蔵する伝清盛像。彼の目には室町時代が見えていたという

『平家物語』の影響もあって、清盛は大仏を焼くなど無茶なことをした悪逆非道な人物という印象を持たれています。実際、清盛は法皇を幽閉した上に、強引に福原遷都を企てたり、東大寺・興福寺を焼き討ちしたように反対勢力を徹底的に弾圧しました。しかしこの清盛が朝廷や荘園領主に強硬な態度をとったのは、彼らを従属させた新たな政権を作ろうとする意志の現れであって、清盛による政治体制があと20年も続けば室町幕府と同じような体制が作られる、そういう可能性があったとも言えます。それぐらいの迫力がある改革を清盛はしようとしたわけです。

私はときどき講演会で言うのですが、頼朝は鎌倉時代を創り上げたが、清盛には室町時代が見えていたのではないかと。そういう視点から見ると、清盛は魅力的な人物だと思いますね。

#### 京大生にひとこと

京都という街は古いものが多く残っていて、今の時代の中で超然としているものがあります。現在を生活しながらも、少し想像力を働かせれば時代を超えた感覚を味わうことができるのが京都の良いところなんですね。

そこでみなさんに心に留めておいて欲しいことは、人間ですから目の前のことが気になるのは当たり前ですが、よりスケールの大きいことを考えていただきたいということです。京都という街は、目の前のことから一步離れて、人間の本質とか不変の真理などの超越的なことをちょっと立ち止まって考える余裕のある街だと思うんです。そうやって人間としてのスケールの大きさをものに付けて欲しいというのが私の希望ですね。

——ありがとうございました

はみだし  
すてーじ  
「いくら寝ても寝足りない」って本当に怖い  
⇒気が付いたら既に暗いとかよくあります

(工・1 indefinite)  
(日が短いせい；編)